私は皆様の盾ですから

斗穹　佳泉

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

ある日、レルゲン中佐より、ゼートゥーア准将へ一本の論文が提出された。

論文のタイトルは『魔法演算処理能力の適正による防核術式及び環境術式の部隊一括集中について』

ゼートゥーア准将が考える大隊構想にうってつけの内容であった。

そして著者は――

目次

第一話　運命を決めた出会い ―― 1
第二話　実戦までに ―― 8
第三話　実弾演習 ―― 18

第一話　運命を決めた出会い

まぁ、なんということでしょう。

孤児院に居た頃測った時は、魔力適正などまったくなかったのに。

「魔法適正A。シェリン・フュッター。君には軍大学へ編入してもらう。」

その日から、私の人生は変わってしまったのです。

どうも皆様こんにちわ、シェリンです。

戦争孤児として幼少期に孤児院に預けられ、図書館通いを繰り返してやっとのことで奨学金を得て大学に進学し、やっと大好きな数学を学べるといった矢先のことでした。

なんと、私に魔法適正があったのです。

しかも、Ａクラス相当の適正が。
それはもう、軍の方々は私のことを放っておいてくれないわけでして。
もちろん、私にだって愛国心はありますよ？
でも、それはそれとして、せっかく勉強を重ねて数少ない枠を勝ち取りましたのに、無駄になってしまいました。
いえいえ、まったくの無駄というわけでもないのです。
軍大学でも、数学を学ぶことはできます。
しかも、魔法適正があるのならば、術式の理論に直接触れる機会もあるわけです。
それはそれで興味深いので、まぁよしとしましょう。

ただ、ここでまた違った選択をしていたら、もしかしたら私は今、戦場にいなかったことでしょう。

「シェリン・フュッター准尉であります。ただいま着任いたしました。」
「うむ。入りたまえ」
「失礼いたします」
場所はある駐屯地。
この駐屯地のとある部屋に行くよう上からの命令によってやってきました。
入室をすると、ガタイの良い人が机に頬杖をして待っています。
しかしその奥、偽りの壁の向こうに見える襟章に、思わず固まってしまいました。
なにせ、准尉ごときではまずお目にかかることのないお方が座っていらしたからです。
バッチリ目が合った、と感じた時には、すでに私の体は敬礼の姿勢でありました。
「じ、准将閣下！失礼いたしました！私はシェリン・ヒュッター学生、帝国軍より魔導准尉を拝命しております！」
ほう？と閣下の口元が動いた気がしました。

閣下に目を取られていましたが、その二つ隣を見ると、より目を取られる方がおられました。

なんと驚き、銀翼突撃徽章を授与された帝国軍最年少のエース、デグレチャフ中尉ではないですか。いえ、襟章を見るに昇進されたようで、今は大尉ですね。

軍大学での講義こそ同じ時間になりませんでしたが、数えるほどですがすれ違ったことはあります。

まぁ、私は編入生でしたので、デグレチャフ大尉は先に卒業されたのですが。

そんなことを考えている間に、偽りの壁が揺らいで消える。

「このように、現学生でも見抜けるような一般的な光学術式です。先程原隊へ送り返した彼らなど、話になりません」

「貴官が散々不合格を突き付けるのも納得だな」

「合格者は彼女を含め１３人。中隊分しかありません」

あのぉ～、というか、私はなぜここに呼ばれたのでしょうか？

合格？

私はレルゲン中佐にこの駐屯地にこの時間に行くようにとだけ言われて来たのです

が……。

そう、私をここへ寄越したのは、レルゲン中佐なのです。

私が現在作成している論文、『魔法演算処理能力の適正による防核術式及び環境術式の部隊一括集中について』の内容に興味を示していただき、何度かお話をさせていただいたことがあるのです。

理論自体は完成しているので、あとは検証を残すのみとなっており、ならばこちらで検証を行うとよいと案内されたという経緯です。

あの、内容をまったく教えられていないのですが、合格、と言ってましたし、これはいったい何の選考なのでしょう？

「構わん、この際多少手荒でも再教育してやれ」

「了解しました」

ゼートゥーア閣下はそうデグレチャフ大尉に伝えると、部屋を後にしました。

残ったのはデグレチャフ大尉の副官であろう女性と、デグレチャフ大尉、そして私です。

「貴官はまだ学生だったな。卒業までにどの程度時間がかかる?」
「はい。残すは論文作成のみとなっております。作成自体も終盤で、耐久検証のみになります。レルゲン中佐より、こちらで検証を行ってはどうかとのご提案を頂きましたので、今回の任に着任いたしました」
「ふむ、そうか。フュッター准尉といったな、私はデグレチャフ大尉だ。彼女は私の副官のセレブリャコーフ少尉だ。このむさくるしい軍の中で数少ない同性の同胞だ、よろしく頼む」
「わ、私からもお願いしますね!フュッター准尉!」
「よ、よろしくお願いします、デグレチャフ大尉、セレブリャコーフ少尉」

これが、デグレチャフ大尉との初めての出会いでした。
この時までは、そんなに悪い空気じゃなさそうだなぁとか思っていたんです。
思えばこの時からセレブリャコーフ少尉をちゃんと見ていれば、デグレチャフ大尉がどのような方か、詳しく知ることができたのではないかと感じます。

月明りが差し込む執務室。

ゼートゥーアは煙草に火をつけ、机に仕舞った作成途中の論文を取り出す。

「シェリン・フュッター准尉といったか。どこかで聞いた名だと思ったが、以前レルゲン中佐が提出した論文の著者だったか。『魔法演算処理能力の適正による防核術式及び環境術式の部隊一括集中について』……なるほど確かに、フュッター准尉はこの大隊案には必要な存在だ」

理論のみで言えば、これにより魔導士の継戦能力は格段に良くなるだろう。検証はこれからだが、理論通りであれば各隊員の魔力消費を２０％程抑えることができるのだという。彼女の論文と才能はまさに大隊の構想案のためにあるかのようなものだ。

「案外、我々は神に愛されているのかもしれんな」

第二話　実戦までに

どうも皆様こんにちわ、シェリンです。
大隊結成から半月と少しが過ぎ、部隊の皆様ともだいぶ打ち解けてきました。
この三週間については、特に記載しないこととします。
ええもちろん、思い出したくもないので。
今日はデグレチャフ大尉が私の論文作成に協力してくださるとのことで、第一中隊の皆様と中隊長の皆様をお借りしています。
「第一中隊と各中隊長の諸君。本日はフュッター准尉の論文作成のため、検証を行ってもらう。詳しくは彼女より説明があると思うが、私個人としては非常に興味深い内容であった。諸君らの今後にも関わる内容だ。では、フュッター准尉。よろしく頼む」
「デグレチャフ大尉、ありがとうございます。まず私の研究内容について皆様に軽く説

明いたします」

説明するのは私が編み出した理論と、皆様がこれから何をするかです。

魔導士というのは、実はかなり燃費がよくない兵科なのです。肝心の魔力量ですが、完全に個人の才能に頼りきっています。そこで、より効率的に魔力消費を抑える方法はないかと考えたのが私の研究のきっかけになります。

魔導士が魔力を消費する中で、最も多いのは攻撃術式と飛行術式になります。そこは魔導士という兵科の存在意義なので、火力を落とすような方法は本末転倒。そこで目をつけたのが、防核術式と環境術式です。

魔導士は経験を積むと、ほぼ無意識的にどんな時でもそれらの術式を使うようになります。何故なら、一々意識的にそんな術式を行っていれば不意打ちにまったく対抗できないまま死んでしまうからです。

魔導士として戦闘をするのならば、必須極まりないことと言えるでしょう。しかしその無意識下で行っている術式が、本人たちの魔力を無駄に消耗し続けているのです。

そこに着目したのが私が研究している内容になります。

サンプルとして、大学で学んでいる魔導少尉１００名を集めて検証を行いました。

魔力量をおおよそ均等に５０人と５０人に分け、片方は防核術式と環境術式を発動したまま、もう片方は意識的に術式を発動させず、魔力が尽きるまで攻撃術式を撃っていただきました。

結果は、防核術式と環境術式を発動させていない５０人が、発動させている５０人に比べ長い間撃ち続けることができました。

魔力消費量に換算すると、およそ２０％になります。

そこで――あ、コホン。

論文の内容を口頭で全部説明するところでした。

私の悪い癖です。

要するに、防核術式と環境術式、各自が発動させているのって魔力がもったいないよね、だったら、演算処理能力に適性がある人に一括で担ってもらうのはどう？という内容です。

そして、それに最適化した術式を組み上げました。しかし、実戦での検証はまだ行っていないので、今回皆様の力を借りて行います。

なので、伝えることは単純です。

「私が皆さんに防核術式と環境術式を展開します。その状態で銃弾や砲撃を受けてください。どれ程の銃撃、砲撃に耐えられるかの検証です。あ、もちろんご自身で防核術式と環境術式は展開しないように願います」

あらあら、ヴァイス中尉が何を言ってるんだこの人はって目で私を見てきます。

その他の方々もざわざわしだしました。

「あ、あの、すみませんフュッター准尉。それはつまり、我々は銃弾や砲弾が降ってくる中ただ立っていろ、ということですか？」

冗談ですよね？とグランツ少尉が質問をして来ます。

もちろん、そんなこと想定内です。

笑顔でお答えします。

「もちろん本気ですよ。とは言っても、皆様私に、大尉や上の階級の方ならともかく、准尉に命を預けるなど、納得のいかない方がおられるでしょう。なのでまず、私を撃ってください。私の防核、環境術式の精度をご覧に入れましょう」

そのために、今回フル装備で集まっていただいたのですから。

「皆様、これで私の検証に協力していただけますね？」

第一中隊の斉射で起こった盛大な土煙の中から、まるで何事も無かったかのように笑顔で歩みを進める彼女に、彼らは自分の目を疑った。

「嘘、だろ？」

「あれだけの斉射を受けて、塵ひとつ服についていない!?」

その後のことです。
何故か私にも、デグレチャフ大尉に向けるような少し、何と言いますか、怖いものを見るような目で見られることが多くなりました。
おかしいですね、私普通の１６歳の女の子ですよ？
ヴィーシャと何も変わらないじゃないですか、え、笑顔になる時の眼鏡が怖い？
普通の丸眼鏡ですよ、何か悪いんですか？

ともかく、検証は無事終了いたしました。
結果も十分実践範囲内であり、これで晴れて私も軍大学を卒業できるというものです。
あ、理論といいますか、そもそもどうやって防核術式と環境術式を部隊一括で管理するのかについての説明がまだでしたね。
まず、私自身をベースに、各中隊の隊長、小隊長を中継点として各隊員に魔力ラインを接続します。魔力ラインというのは、めちゃめちゃほっそい魔力で出来た糸のようなものだとお考え下さい。これは、各隊員を私の体の一部と認識できるようにするための

方法になります。
魔力ラインを接続しましたら、各隊員を中心点として、半径１．５ｋｍを観測術式でカバーし、物体の入射角・空気成分から、防核術式の角度計算、環境術式の強度等を隊員ごとに調整いたします。
防核術式、環境術式が作動した場合、対象の隊員には魔力信号で角度、距離、発動理由が魔力ラインを通じてリアルタイムで送信されます。
もちろん、魔力燃費をよくするために、防核術式は改良し、攻撃や衝撃を逸らすことに重点を置いております。
私から各中隊長へのラインは５０km、そこから各小隊長へのラインは３０km、そこから隊員へのライン１５kmが、私の演算能力では限界の範囲です。
これでもかなり演算に適性があると自負しておりますので、この範囲を一般航空魔導士へ普及することは難しいと思いますが、魔導士の新たな戦術を作成したといって良いでしょう。
もちろん、安全には安全を重ね、私が処理できない範囲外に出そうになった際や、集中砲火を受けている隊員の処理が追い付かない場合は、事前に警告をラインで送ります。術式範囲外に出ようとしています、自己防衛のため防核術式と環境術式の展開願います、といった内容のものなどです。

というのが簡単な説明となります。
今回改めて防核術式を調べたところ、なんと燃費の悪いことか、逸らすではなく１００％受け止めるような術式となっております。
それは魔力を多く消費するわけです。

さて、検証が終了し、第一中隊の皆様にはお帰り頂きました。この度はありがとうございました。
最後にデグレチャフ大尉にお礼を言い、現在は帰途についています。

ところで、デグレチャフ大尉。
「ん？何かねフュッター准尉」
「途中から大尉も参戦してましたよね、何なんですかあの威力、私を吹っ飛ばすおつもりで？」
ジト目で私の小さな上官を見ます。
ええもう、他の方たちは私相手に撃つということで多少は手加減（本気でやれと言ったのに）していたようですが、デグレチャフ大尉は笑顔で銃撃ってましたもんね？

隣でヴィーシャが、「ちょ、大尉殿！もうちょっと抑えてください！」と泣きついてましたもん。
「そういえば丁度いい憂さ晴らしになったな。そうだ、今後も私撃たれてみないか？チョコレートなら大量にあるんだが」
「私をサンドバックだと思ってます？」
「冗談だ、さっさと論文を書き終えて卒業しろ」

よかった、とりあえずサンドバックになることはなさそうです。

もう少しでデグレチャフ大尉が提案した一か月が過ぎようとしています。
自分の研究が実を結んだことにうきうきで、今日の夜はあまり眠ることができなさそうです。

……あれ、というか、私、まだ本当に人を殺したこと、ないや。

軍人ですので考えてはいましたが、いざそれが近づいてくると、少し怖くなります。
どうしましょう、今夜は本当に眠れなさそうです。

第三話　実弾演習

「総員、傾注！大隊長より、訓示！」
「さて大隊諸君、戦争だ。いや、戦争のようなしろもの始まりだ。折しも今日は、私の誕生日だ。なんとダキア軍からサプライズプレゼントで、実弾演習の標的を頂いた。」
「我々にはフュッター准尉がいる。私の砲撃を丸腰で受けた諸君はその信頼性を直に感じたはずだ。さらに航空支配が約束されている以上、ある種のマンハント。ボーイスカウトを蹴とばすようなものだ。落ちることはまずないだろうが、一応留意せよ」
「「ハッ!!」」

どうも皆様こんにちは、シェリンです。

私にも遂に初の実戦の日がやってまいりました。
敵はダキア公国、航空戦力はゼロのようです。
……そんなことあります？
なんなら魔導士も確認されていないとか。
いくら魔導士に適性のある人数が少ないとはいえ、三個師団程の戦力に配備なしなど、考えられません。

すでに私も爆裂術式を何回か敵に向かって撃ちました。
こう、何というか、あまり気持ちよくなるというものではないですね。

「どうだね、フュッター准尉。これで君も立派な軍人になったわけだ」
「……変な感覚です。人を殺すというのは、なんだか気持ちよくは無いです」
デグレチャフ少佐は私の感想にフッと笑って、そんなもんだと言葉を返します。
「人を殺すことを楽しんでるようなサイコはそうそういるもんじゃない。……ん？連中、何をしている？」
デグレチャフ少佐の視線の先を見ると、何やらバラバラだった敵が一か所に集まり陣

形のようなものを組んでいるのが見えます。
「おそらく、統制射撃の方陣かと」
訝しむ声を上げるデグレチャフ少佐にセレブリャコーフ中尉が答えます。
確かその方陣って、騎兵の時代に使われていた戦術じゃありませんか？
馬鹿な、時代遅れも甚だしいぞと呆れ声で呟いていたデグレチャフ少佐が、襲撃隊列を解いたヴァイス中尉を見て、イライラ度を増幅させております。ちょっと怖いです。
しかし、私も同様に溜め息を吐きます。
「どうして隊列をとく？……」
「あれは、どうやら教本通り射程限界にまで引こうとしているみたいですね。何でしょう、私って信用されてないんですかね？」
「ハッ、空を飛ぶ魔導士に歩兵の弾が当たるとでも思っているのか？それに加えて我々にはフュッター准尉がいるのだぞ。これは帰ったら少々灸をすえる必要がありそうだな。よろしい、我々も参加だ。中隊、我に続け！」

はてさて、本当に、おかしな話です。
私たちが攻められていたはずですのに、我ら大隊、いえ、中隊のみで敵の総司令部まで到着してしまいました。
ここまでそんなに時間はかかっておりません。

途中、卑怯だぞ、降りてこい等と宣う方がおられたのですが、こう、何と言いますか、馬鹿なんでしょうか？

「帝国へようこそ、ご入国の目的は？ビザはお持ちですかぁ？」
「み、皆殺しにしろ！撃てぇ!!」
デグレチャフ少佐の降伏勧告も空しく、返ってきたのは死をお望みという返事でした。
私たちに向けられた豆鉄砲の弾が、防核術式に触れた瞬間に直角に地面に落ちていきます。
はぁ、まったく、こんなおもちゃごときじゃ実戦練習にならないじゃないですか、もう。
その後はデグレチャフ少佐の命令通り将官以外を撃ち、付近の敵兵を一掃しておりま

した。
終了次第大隊が集結、デグレチャフ少佐が次の命令を発します。
「残敵掃討は友軍に任せて、我々は前進する。目的は、首都だ。ものは試しだ。行けるところまで行こうではないか。我々ならば、前に進める」

……想像はしていましたが、対航空防護など皆無でありました。
今回、私の役割はほとんどないようなものです。
ダキア公国は一昔前の時代からタイムスリップでもしてきたのでしょうか。
「よし准尉、さっさと警告を発しろ。規定通り、国際チャンネルでだ」
「え、あの、本当に私でよろしいのですか?」
私の言葉に、大隊総員がデグレチャフ少佐をじっと見つめます。
それは、そうです。
「確かに、私がやった方が良さそうだな」

確かに私がやった方が良さそうだ、と一息つき、デグレチャフ少佐がマイクをＯＮにしました。

「せんせい、ぼくたち、わたしたちは、こくさいほうにのっとり、せいせいどうどうせんそうすることをちかいます。けいこくします！ていこくぐんは、これより、ぐんじしせつをこうげきします！」

……どなたですか？

ヴァイス中尉の言う通り、実は演劇をしてらっしゃった……？

あの惨劇の再教育を行った方とはとても考えられません。

「さて諸君、国際法上の義務は果たした。仕事にかかるとしよう。総員、長距離用術式展開！」

デグレチャフ少佐からの命令に、ヴァイス中尉が号令をかけます。

「目標、兵器工場。各中隊は、少佐殿に合わせて斉射せよ！」

「総員、撃て！」

大きな花火です。ここまで大きいのはなかなか見られません。

可燃性の材料に火が付いたのか、連鎖的に広い範囲で爆発を繰り返しています。

「やれやれ、ダキアには足を向けて寝れんな。盛大な実弾演習どころか、演習後の花火まで楽しませてくれるとは。止まれ、目標は達成だ。さて、帰還するとしようか。大隊諸君」

これが、私の初めての戦場でありました。

圧勝です。もうちょっと、こう、苦戦とはいいませんが、魔導士として戦闘するくらいの練習相手であってほしかったです。

実弾演習とはよくいったものですが、あんな銃では防核術式に傷などつくはずもあり

ません。

というか、観測術式で各隊員付近の弾道は視えているのですが、まったくと言っていいほど私たちにかすりもしません。

とはいえ、多少の緊張感を持って臨むことができましたし、私は命令を命令として割り切ることのできる人間なのだと理解もできましたので、十分実弾演習として機能してくださいました。

デグレチャフ少佐の仰る通り、ダキアには足を向けて寝れません。

余談になりますが、今後必要になってくるである術式として、眼鏡を綺麗にする術式を考案いたしました。術式を展開した瞬間に、指定した眼鏡の汚れが綺麗さっぱり落ちるというものです。

大隊のみなさんも、と思ったのですが、みなさん視力が良いのをすっかり忘れておりました……。